花木の冬囲い

庭樹・盆栽・バラ・高山植物

石田文三郎

毎年の例ですが、春から夏にかけて繁茂した庭樹類、盆栽、バラ、高山植物など、常緑樹を除けば秋には或る植物は紅葉し、或る植物は黄葉して、やがては冬ごもりに入ります。

東京附近のように冬の温度があまり低くなく、しかも雪が少ないというような所では、庭樹、盆栽、バラや高山植物などの冬囲いの心配はいりませんが、北海道では雪が多いのと冬の寒さが厳しいので、冬囲いをしなければ、せっかく夏の間茂った植物も一冬の間に冬枯れしたり、雪のために枝を折られたりすることが多いものですから、これらの冬囲いについて述べることに致しましょう。

一　庭樹の冬囲い

北海道の山野の樹を庭園樹として植込んだもの、例えばモミジ類、ナナカマドなどのようなものは冬の寒さや雪のために傷められることが少ないのですが、本州方面から導入した庭樹は是非冬囲いをしなければなりません。

灌木類

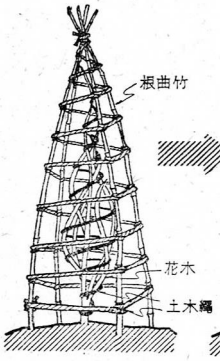
ヤマツツジ、エゾムラサキツツジ、ムラサキヤシオツツジ、レンゲツツジ、ヨドガワツツジ、ドウダンツツジ、ミツバツツジ、ヨウラクツツジ、北海道産エゾシロハナシャクナゲ、本州産シャクナゲ、ボケ、レンギョウ等の灌木類は冬の寒さに対しては殆ど傷むということは少ないのですが、冬期間、雪のためは押潰されることがあるので、十月下旬から十一月初め頃に株の根元の幹に土木縄を縛りつけ、その縄で枝を内側に入れて、ぐるぐる上に巻き上げて縛り、その周囲に根曲竹を株の大小に応じて四～一〇本ぐらい株の周囲に立て先端を一ヵ所にまとめて縛り円錐形のようにします。竹と竹との間は碁目になるよう縄で編み、雪のために押潰されないようにすることが必要です。（第一図）

外国産シャクナゲ

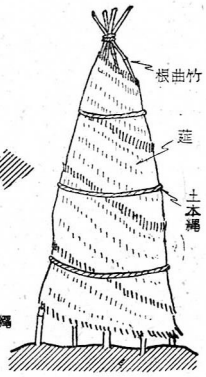
外国産シャクナゲ類のピンクパール、ホワイトパール、アルボレアム、フォチネーなどの種類は冬の寒さに弱いので十一月初め頃、灌木類と同じ要領で行ないますが、更に周囲をムシロ二～三枚位重ねて巻き、葉や幹が外から見えぬように囲って防寒することが大切でしょう。（第二図）

このほか、一番安全な方法は十月下旬頃外国産シャクナゲを掘り取って地室（ジムロ）に植込んで越冬させ、春雪どけ後に外に出して植込むものが一番良い方法です。

リュウキュウツツジ、牡丹、アジサイ、玉イブキ、貝塚イブキ、木ツゲなどは冬の寒さに弱いのと雪のために枝折れするので冬囲いしてやらなければなりません。その方法は前述のツツジ類と同様であるが、この場合あまり大事に過ぎて莚を三重にも巻くということは、冬の間、内側がむれ、かえって樹を枯らすことになるので、莚は一重位で囲ってやるのが適当です。



第1図



第2図

二　松の樹、オンコ、海棠、白蓮等の枝釣り

これらの樹は冬の寒さには強いが、雪のために枝が雪折れする場合があるので、枝を土木縄で釣ってやることが必要です。

その方法は次のようにするのが良いでしょう。

先ず、庭木より一㍍～二㍍ぐらい高い丸太を用意し、その丸太を釣ってやる樹の幹に縄で縛りつけ、丸太の先端には土木縄を樹の大きさや枝張等によって一〇～三〇本ぐらい結んでおきます。その縄の長さは枝の高低により下の方にある枝の縄は長く、上の方にある枝の縄は短くなるようにし、しかも一方にならず四方から枝に縄を結びつけることが必要です、枝を釣る場合、自然の姿で釣るべきで、特別高く釣ったり、低く釣ったりする必要はありません。このようにすれば雪のために枝折れを防ぐことができます。

三　庭木の幼苗の冬囲い

オンコ、ライラック、松類、ツツジ類などで、高さが六〇㌢内外の植木はそのまま冬越させると雪の重みで幹が折れることがあるので、一株毎に根曲竹を根元に一本立てて、その根元から縄で螺旋状に枝を中に入れるように上の方に巻き上げ、苗の先端で硬く結んでやることが必要です。この縄を巻く際、固く巻き上げて結ばないと、雪の重みで苗だけが押潰されて、かえって悪い結果になりますので注意が必要です。

四　盆栽の冬囲い

北海道の盆栽はいろいろの種類のものが栽培されているが、中でも蝦夷松、五葉松、赤松、黒松、真柏、樗、その他のものがあ

ります。これらの盆栽は盆栽室の中に入れて越冬させるのが最も完全ですが、どこの家庭でも盆栽室を持っているというわけではありません。このような場合には、外で冬囲いして越冬することになりますので、その方法を述べることにいたします。

十一月初め頃、日当りが良く、あまり地下水の高くない所を選んでエゾ松とか五葉松とか真柏の鉢物を集めて並べ、六〜七個一ヵ所に生け込み、土は鉢の上に五〜一〇糎かかるようにし、その周囲に根曲竹を一五糎置きぐらいに立て、その先端を一ヵ所に集め縄で結びます。灌木類のツツジ類を冬囲いするのと同じ要領で良いのですが、盆栽は枝が一本折れても価値が落ちますので、竹と竹との間を縄で結ぶ場合、なるべく細かく碁目を造り、積雪のため、枝が押し潰されないようにしなければなりません。

盆栽を家の床の間やストーブのある室で冬越する人がありますが、夜と昼との温度の変化が激しいので不適当です。

五　バラの冬囲い

東京附近から南なら冬囲いの必要はありませんが、北海道のように冬の寒さが強く、雪の降るところでは必ず冬囲いの必要があります。バラは十一月になっても花が咲いているために、十一月下旬または十二月に入って雪が降ってからあわてて冬囲いする人がありますが、あまり遅く冬囲いすることはバラのためによくありません。バラの花は咲いていても、惜しまず十月下旬から十一月十日頃までには冬囲いしてやらなければなりません。十一月下旬以降になると、北海道では時として急に温度が零下八〜一〇度C以下に下ることがあります、このような時に冬囲いしていないバラの株は凍傷にかかって枯れる場合があります。

冬囲いの方法

バラは前にも述べたように十一月になっても花は咲いておりますし、葉も着いておりますが、先ず株の根元に土寄をいたします。この土寄は出来るだけ根元に高く土が寄せられるようにします。土寄が出来たらバラの幹が一・五尺以上も伸びているものは一尺ぐらいに鋏で切り、根元を縄で結び、この縄で上の方に向って螺旋状に枝を中に入れて巻き上げ、幹の先で結びます。その後、根曲竹を三〜四本を深く株の周囲に押し込み、その先を一ヵ所に集めて縄で結びます。更に土寄せした株の周囲に落葉を集めて来て適当に入れてから、莚で枝や幹が出ぬように巻き、その先を縄で結び、莚がほどけぬよう三ヵ所位縄で結んでおきます。

他の方法は、前述のように根元から縄で螺旋状に巻き上げてから、株の根元の一方を根を傷めぬように掘って、バラの株を横倒しにし、その根元や幹と枝に土る三糎以上の厚さに覆土し、その上にムシロを一枚覆い、風に飛ばされないよう縁石などで抑えておく方法があります。

春雪どけ後、四月下旬頃枝を傷めぬよう莚及び土を除き元のように起してやればよいのです。この方法はとくに寒い地方では越冬法として最も良いやり方であります。

バラの鉢植越冬法

鉢植のバラは十一月初め頃、地室をもっている人は地室に入れて越冬させれば最も簡単ですが、地室のない人は地下水のなるべく低い場所を選び、三〇糎ぐらいの深さに溝を掘り、バラの鉢植のものは枝を細縄でぐるぐる巻いたものをこの溝の中に斜めに鉢をねかせて入れ、その上に鉢やバラの枝が見えぬくらい一〇糎内外の厚さに土をかけて、更にその上に一枚莚をかけて越冬させます。春雪どけ後、四月中旬頃、バラの枝や鉢を傷めぬよう掘り出して、日当りの良い、霜の当らぬような場所に置けばよいでしょう。

六　高山植物鉢植の冬囲い

高山植物の鉢の冬囲いは十一月上旬頃、なるべく日当りの良くない少々日陰になるような春雪どけの遅い場所を選びます。ここに高山植物の鉢を集めて、地面に生け込み、地上に鉢を出さぬように土をかけておけばよい。この鉢を地面に生け込むということは、冬の寒さのため地上に出して置くと鉢が凍って割れるのを防ぐためと鉢の中の土も強く凍らせないように高山植物の根を保護するためです。なお、この中で灌水類、即ちホソバイソツツジ、カンコウラン、キバナシャクナゲ、チシマヒョウタン、ボケ、タカネナナカマド、ツガザクラ、ウコンウツギなどは鉢を地面に生け込んだなら周囲に添竹を数本立て、円錐形にしてその頭を束ね、竹と竹との間を縄で碁の目にあんで枝や幹が雪のために折れぬようにすることが必要です。

その他の方法は、このような土地に板を敷き、その上に高山植物の鉢植を並べることもありますが、冬の寒さのため鉢が凍って割れることと根が凍って傷むことが多いので、手数でも鉢は地面に生け込んだ方が良いようです。

鉢を生込む場所が日当りの良い場所だと春の雪どけも早く、そのために高山植物や鉢が雪の中から現われ、外気は日中は暖かであるが、夜分は急に温度が下るために寒暖の差が激しく、その間に高山植物が傷む場合がある。そのため、冬囲いの場所は春の雪どけのなるべく遅いような場所で、外気の日中と夜分との温度の差が少なく、四月初め頃徐々にとけて高山植物の鉢が雪から出て来るというような場所を選ぶことが秘訣です。もし三月中に雪がとけて、高山植物が現われるようであったなら、外から雪を運んで高山植物の上に覆い、四月になってから鉢が雪から現われるようにする必要があります。

本州方面の暖地では、冬の間、雪があまり降らないので霜柱の害を受けることが多いから、比較的日当りの良くない場所を選んで、必ず地面に鉢の見えぬ程度に生込み、菰で南方をあけた片屋根の霜除けを造り、その下で越冬させるのが最も安全でしょう。霜除けのため、落葉を覆うこともあるが、この方法は時として冬の間に昆虫類がその中に入り害を受ける場合もあるので好しくありません。

（雪印種苗・造園部）